

活動報告 博物館教室〈楽しいしぼり染め〉

中級―「藍の絞り染めで浴衣を作る」

宮本康男*

はじめに

平成10年度に工芸部門で実施した博物館教室「楽しいしぼり染め―中級」における成果を、これに至る経過と併せて報告する。

1 教室開設に至る経緯

秋田県内に伝えられる絞り染めの技術は、我が国の絞り染めの技術の推移を知る上で貴重な情報を含んでいる。また、北辺の風土の中で独自の洗練を遂げた絞り染めの意匠は美しく、高い芸術性を持つものであるとともに、我々の先祖が培ってきた精神文化を色濃く反映するものである。

当博物館としてはこの貴重な無形文化を後世に伝えることに大きな意義をみとめ、平成7年(1995)企画展「秋田の染めと織り」のなかで鹿角紫根・茜染め、浅舞絞他の作品と技術を大きく紹介した。これらについては以前にも展示の中で何度か紹介されてきたが、平成7年の展示では、できるだけ多くの優れた作品と技術・原材料をあわせて展示し、特に無形文化としての立場を強く主張した。幸いにしてこの展示は大きな反響を呼び、新聞・テレビ等のマスメディアを通して我々の主張を展開する機会を得ることもできた。このような大きな反響を得た一つの要因は、先行する染織研究家の人々による出版物や、展示での紹介により秋田の絞り染めが全国的に知られるようになっていたことである。

この展示により郷土の絞り染め文化の存在を広く知ってもらったことは一つの成果であった。当館工芸部門ではこれを契機として、無形文化の伝承を根底に据えた絞り染めのワークショップを持ちたいと考えた。その活動を通して、たとえ僅かでも本県の絞り染めの文化を生きた形で伝承できないものかと考えたからである。

2 これまでの活動

平成5年以来、絞り染めに関する博物館教室をこれまで6年間実施してきた。

この教室は、稽古ごとの域を出ない受け身の文化講座としてスタートしたが、年を重ねるにつれ参加者はテーマ意識を持ち、次第に主体的・積極的な活動内容を持つ教室へと変化してきている。

これまでこの教室へは、児童・生徒、学生、会社員、教員、草木染め教室や編み物教室の主宰者、主婦、定年等で職を退いた人など幅広い層の人々が参加してきた。

つぎに、これまで行ってきた教室の活動内容をあげておく。「***」は教室名

●平成5年度 「草や木で染めてみよう」

簡単な絞りで草木染めをする。染料：オオマツヨイグサ(銅媒染)、アカネ(アルミ媒染)、ヨモギ(鉄媒染)。被染色材：絹、木綿(呉汁下地・下地なし)

●平成6年度 「草や木で染めてみよう」

簡単な絞りでアイ(藍)の生葉染めをする。染料：アイ(アイの生葉のジュース)。被染色材：絹、木綿

●平成7年度

「アイの生葉で染める」

簡単な絞りでアイの生葉を用いた簡易建て染めをする。染料：アイ(アイの生葉のジュースを酸化させた後アルカリ性にしてハイドロで建てたもの)。被染色材：木綿

「絞り染めの文化にふれる」

秋田県内に伝わる伝統絞りの技法を用いて絞り、藍で染める。染料：インド藍をハイドロで建てたもの。被染色材：木綿

●平成8年度

前年度と同じ。

*秋田県立博物館

●平成9年度

「楽しいしぼり染め」5回

秋田県内に伝わる伝統絞りの技法を用いて絞り、様々な植物染料で染める。

染料：第1回（インド藍）、第2回（インド藍）、第3回（アカネ）、第4回（アイの生葉）、第5回（ムラサキ）。被染色材：木綿、絹

●平成10年度

「楽しいしぼり染め—初級」1回

秋田県内に伝わる伝統絞りの技法を用いて絞り、アイの生葉を用いて建て染めをする。

「楽しいしぼり染め—中級」4回

秋田県内に伝わる伝統絞りの技法を用いて、浴衣地1反（幅40cm長さ13m）を絞り、藍の絞り染め浴衣を作る。染料：インド藍、蓼藍。被染色材：木綿浴衣地

※このような館主宰の教室のほかにも、公民館等のサークル活動の実技研修会や小学校の体験学習に協力する等、あらゆる機会を捉えて絞り染め文化の普及を図ってきた。

3 平成10年度教室「楽しいしぼり染め—中級」

本当初歩的な体験講座として出発したこの教室であったが、年を重ねるにつれてもう少しレベルを上げてチャレンジしたいという参加者の希望がでてくるようになった。それを受けて平成10年度は「中級コース」を設けた。「初級」は初心者を対象としてこれまでの内容で実施し、「中級」は経験者を中心に一部自信のある初心者を加えて本格的な絞り染めの制作をめざした。

「楽しいしぼり染め—中級」は4回（1回4～5時間の内容）の計画で実施したが、実際にはこのほかに染め作業だけの日を4回もった。

●第1回

①鹿角紫根・茜染め、浅舞絞のデザインや技術の特徴について学習する。

②基本的な縫い絞り、巻き上げ絞り、鹿子絞り、三浦絞り、板締め絞りの技術と用具について学習し、一つ一つの技法を確実に身につける。

●第2回

①秋田の伝統的な絞りの特性をふまえて浴衣のデザインを考える。

②部分部分を試験的に絞って試し染めを行う中で問題点を見つけだし、克服の努力をしたり、絞り染めとしてより合理的なデザインに変更したりする。（家庭で計画的に一反分を絞る）

●第3回

①計画的に絞り上げた一反分の布地を染める。

（家庭で染めた布地を乾かし、絞りを解いて仕上げる。浴衣（帷子）に仕立てる。）

●第4回

①絞り染めの布地を浴衣（帷子）に仕立てたものを持ち寄り合評会を行う。

おわりに

デザインについては、古いデザインを敷き写すだけでなく、それらのデザインが生み出される必然性を考えた。これらの共通の特徴を生み出すデザインポリシーを時代を超えて共有することが、文化の伝承として大切であることの共通理解ができたと思う。

絞り技術の基礎トレーニングの内〈縫い絞り〉では美しい絞り模様を出すためには生地厚さと針目の大きさの最適な関係を見出す努力が大切であると感じた。

鹿子絞りは、かぎ針を用いる、いわゆる機械絞りと、突き出し鹿子の二つを練習したが、突き出し鹿子は解けないように連続して絞るのがやや難しく、機械絞りのほうが容易であった。

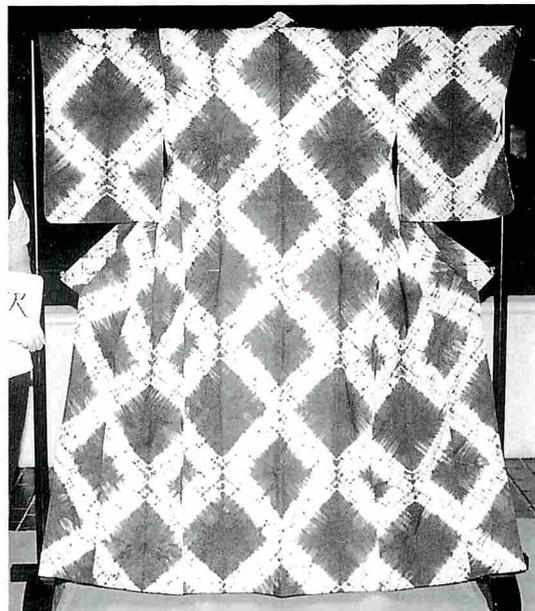
三浦絞りは習得に一番手間どる絞りであったが、本県の絞り染め技術の中で重要な位置を占める技法であるので練習には力をいれた。大分絞れるようになったが、粒と粒の間隔をあけないように絞るには更なる熟練が必要である。三浦絞りでは強く括ると白い輪が連なるだけの表現になるので、括り糸をゆるく掛けて、括った糸の下に藍を多少滲みこませて美しいむき身模様が出るようにする。しかし、ゆるく括るといのは至難の業で、最初の内は解けないように括るのが精一杯であった。

一反約13メートルを飽きずに根気強く絞るという作業は初めての者にとって想像以上に大変な仕事であったが、その成果は、各人の大きな自信となって残った。

以下写真で作品と活動風景を紹介する。



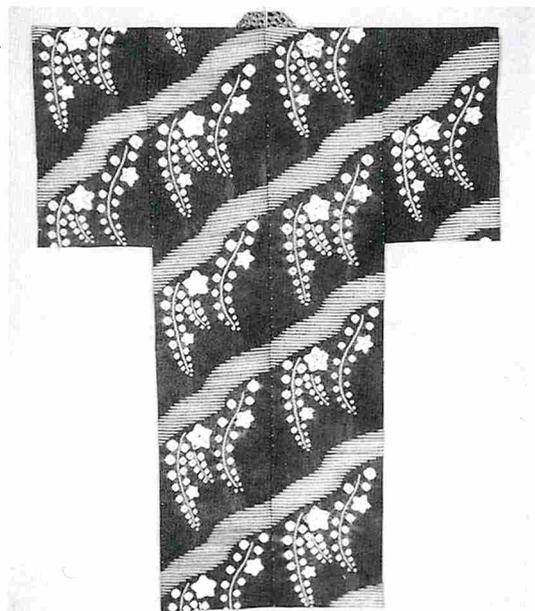
1
蝶文様浴衣
秋田市
石井千恵子



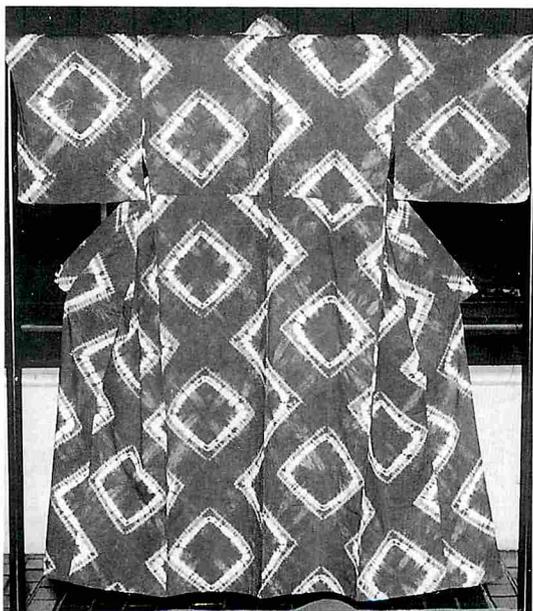
2
大柵文様浴衣
秋田市
滝沢秀子



3
立涌文様浴衣
秋田市
佐藤久美子



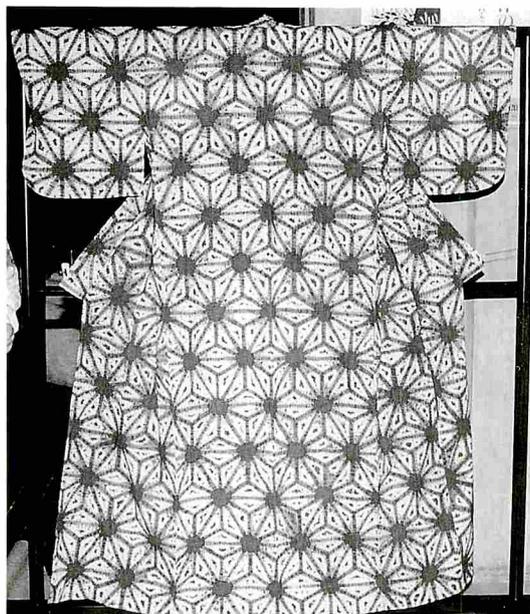
4
藤花文様浴衣地
秋田市
長嶋英子



5
小柵文様浴衣
秋田市
奈良笑代



6
丸文様浴衣
他
秋田市
中野竹子



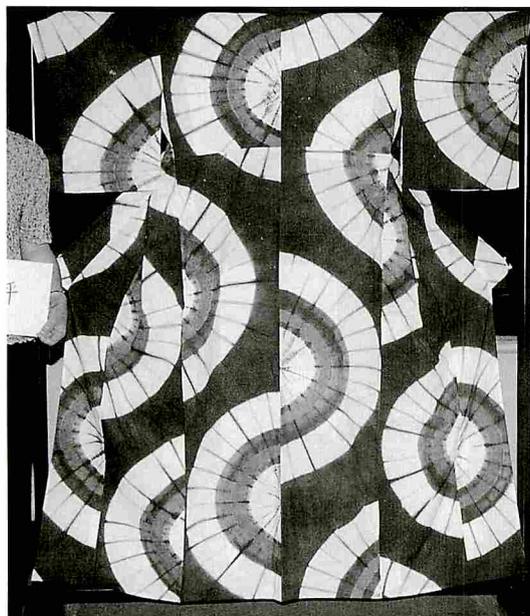
7

7
麻ノ葉文様浴衣
秋田市
佐々木とも



8

8
立涌文様浴衣
秋田市
斎藤セイ



9

9
板縮傘文様浴衣
飯田川町
山平初子



10

10
蜻蛉文様浴衣
能代市
秋本ルミ子



11

11
花菖蒲文様浴衣
山本町
川村悦子



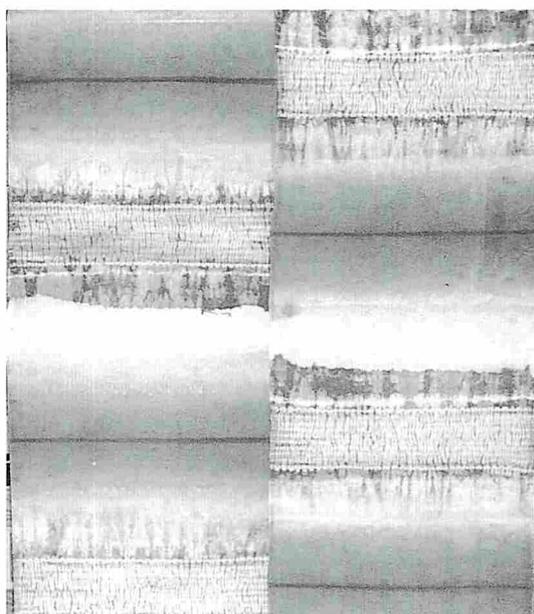
12

12
板縮文様浴衣
秋田市
嵯峨エイ子



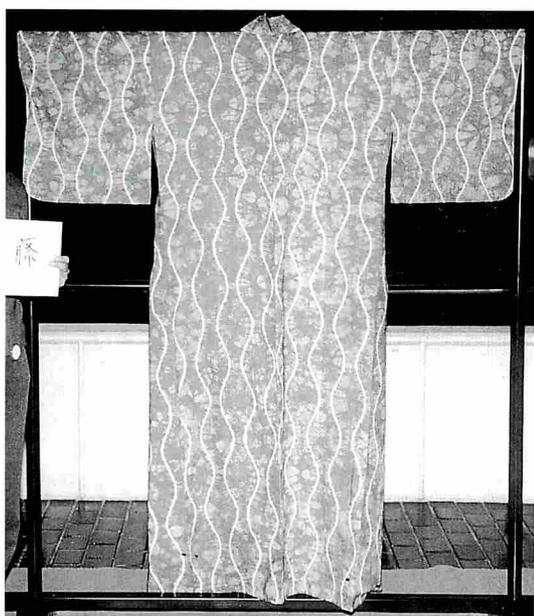
13

13
大樹文様浴衣
秋田市
武田芳子



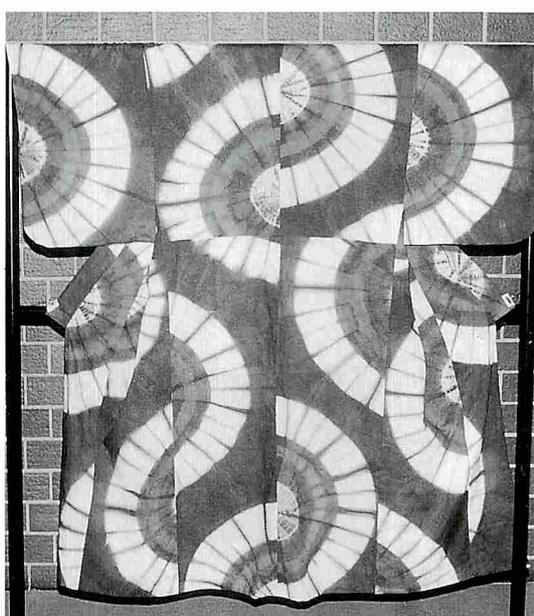
14

14
段変わり文様
浴衣地
秋田市
伊藤まり子



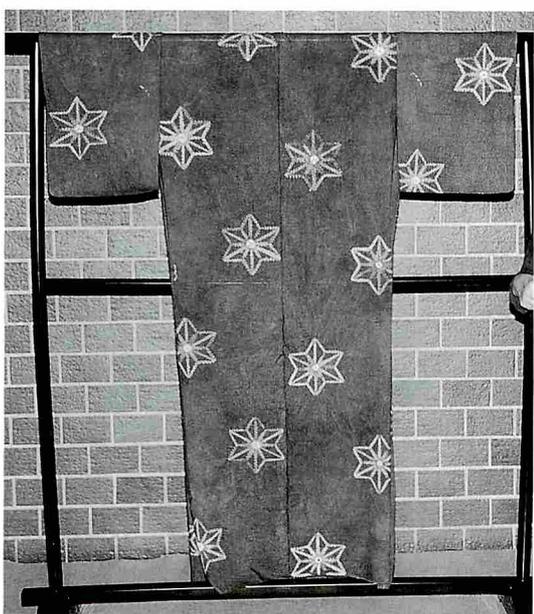
15

15
立涌文様浴衣
秋田市
佐藤久美子



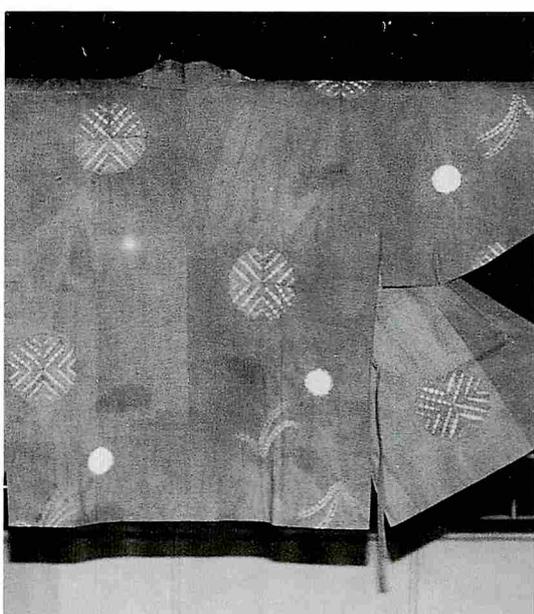
16

16
傘文様浴衣
秋田市
石井吉兵衛



17

17
麻ノ葉文様浴衣
秋田市
小西美知



18

18
丸文様上衣
秋田市
嵯峨裕子



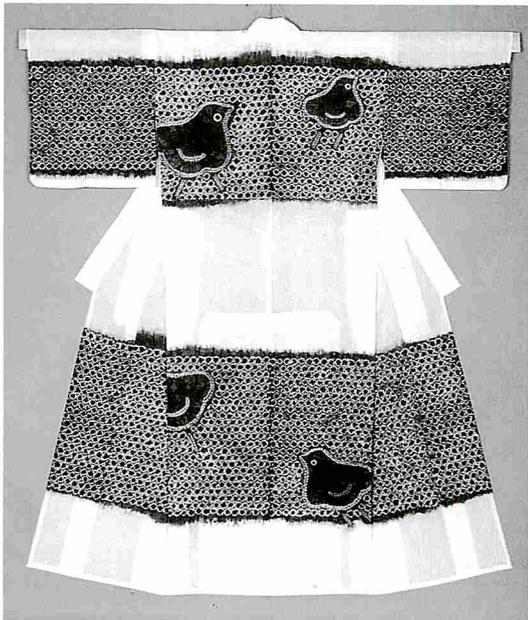
19

19
立涌文様浴衣地
らせん絞浴衣地
能代市
船山葉子

20



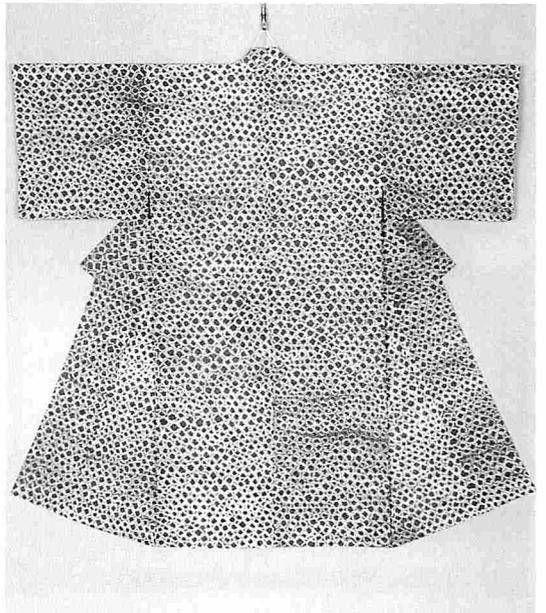
20
大榭文様浴衣
能代市
船山葉子



21

21
波千鳥文様浴衣
秋田市
佐藤康子

22



22
三浦絞浴衣
秋田市
佐藤信孝



タタミ絞りの試し染め

教室風景

藍染め



藍の発色